

純白の花負いて

詩人竹内浩三の“筑波日記”

桑島玄二著

理論社刊



コトシカレ、ノート シタラ、田中 雄 君 オ
ヨバシタ。仕事カハカトツテ 井ノナ

230002



日文 701738755

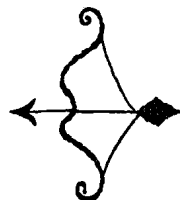
桑島玄二著

純白の花負いて

詩人竹内浩三の“筑波日記”

理論社刊





NDC 911 A5変型 20cm 222p

1978年初版 8395-32002-8924

著者 桑島玄二 (くわじま・げんじ)

純白の花負いて 1984年4月第六刷発行©

制作 小宮山量平 発行 山村光司 発行所 株式会社 理論社

住所 東京都新宿区若松町15-6 電話 03(203)5791 振替口座 東京9-95736

まえがき

屍体

1

まだ狭苦しい早朝の

砂の上に

横たわる鳥の屍体^{いさい}

夜っぴてそれを揺り動かしていた

海鳴りの音はすでに遠退いたが

半ば開いたままの嘴^{くちばし}に

前の日の夕陽が

どろりと溜まって残っている

2

砂の上の鳥の屍体

それは砂のように乾いた老人か誰かの手で

簡単に拾い上げられるだろう

それは収穫期の田に寄る群雀を威し払うために
竹に刺されて中空に掲げられるだろう

しかし

切り倒された際の物音を

水粒のように肌に留めている青竹で

3

一本の青竹が

秋空の縦を一筋 占有する

その尖端の黒い屍体

それが

おまえの屍体の大きさにまで脹れ上がってくる

半ば壊れたままの眼窩に

前の日の血糊が

どろりと溜まって残っていた

二十年ほどまえの屍体の大きさに

もう二十年もまえの戦死の様ななんか詩に書くなとひとに言われたが

青竹を撓めずに 中空に

これは、ずっと以前に、『詩学』という詩の雑誌に掲載したわたしの詩だ。そのとき、

もう二十年もまえの戦死のさまなんか書くなと人にいわれたと訴えている。それから更に十年ほどたった。戦後三十年というわけである。そしていまだにわたしは、戦争と戦死した詩人のことばかり書いている。いつになったら、もう書きませんといえるのだろうか。中空に、青竹につき刺されたままの黒い鳥の屍体を、おろすときがくるのであろうか。

『筑波日記』の筑波は地名であって、あの筑波大学の所在地とおなじところである。これは、竹内浩三上等兵（戦死して兵長）が、茨城県筑波郡吉沼村東部一六部隊（落下傘部隊）の演習にあけられていたときの、軍隊日記であり、当時の内務班勤務のさまが、じつに克明に記入されている。小型、暗緑色の市販品で、遺された葉書から察するに、かれの乞いに応えて、実姉の松島こう子が差し入れたものであろう。見開きには、「コノマズシイ記録ヲワガヤサシキ姉ニオクル」とある。

『筑波日記』は二冊あったが、そのうちの一冊は、兵営に面会にきたかれの従兄に、ひそかに託して渡したものの、その従兄が、昭和二十年五月の東京空襲にあい、焼失してしまった。^{*}ちなみに、竹内はその空襲の一カ月ほどまえ、二十年四月にフィリピンで戦死していた。

わたしが紹介できるのは、残された一冊についてだけである。^{**}兵営から姉に、宮沢賢治の詩集を送ってくれと注文があった。姉が届けると、早速送り返してきた。「軍隊には置いておけないのかしら」と思いながらページを繰ると、中身の一部をえぐって、暗緑色の表紙の小さな手帳がはさんであった。昭和十九年一月一日から四月末日まで、一日も欠かしていない日記である。竹内の筆では「筑波日記、冬カラ春へ」とある。焼失されたもの

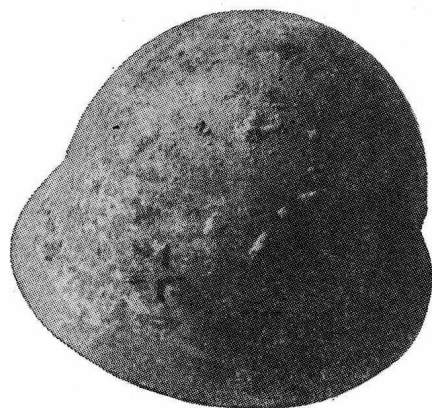
は、竹内流にいえば、「夏カラ秋へ」であつたろう。

次の冬からは、かれの音信まったくなく、戦死の悲報によつてはじめて、フィリッピンに渡っていたことを、遺されたたったひとりの姉（姉弟の両親ははやく逝去）は知つたのである。

桑島 玄二

* Ⅱ後日、従兄の大岩保氏から松島こう子氏を通じて、「ひそかに託された」ことはない、というお話を伺った。その点にかんする私の訂正と推論は、本書の「あとがきに代えて」に記しておいた。

* * Ⅱ松島こう子氏の「好意で、この一冊にめぐりあえた私は、足立善一氏のおすすめに従い『天聲』誌の39号（昭49）から43号（昭50）までの五回にわたり本稿を連載した。



もくじ

第一章

戦死やあはれ

7

第二章

ああ純白の花負ひて

47

第三章

青春の午前の時間

83

第四章

赤子 全部才返シスル

123

筑波日記

竹内浩三
桑島玄二編

159

まえがき

あとがきに代えて

1

付刊竹内浩三略年譜

220 214

そうてい 小宮山量平

写真提供 松島こう子

共同通信

第一章
戦死やあはれ



一等兵姿の竹内浩三

「ファシズムは、原理的に政治至上主義になる」と、丸山眞男まるやま まさおはいった。ここからわたしは、かつてのプロレタリア文学運動における、「政治と文学」についての激しい論争をおもい出すのであり、また、「芸術に政治的価値なんてものはない」と断じた中野重治しげはるをおもい出さないわけにはいかない。太平洋戦争中、中野重治の『斎藤茂吉ノオト』が、ある軍需会社の図書室の書棚に並べられていた光景が、昨日のことにようにして目にうかぶ。そのころ、わたしは、『斎藤茂吉ノオト』を、宝物のようにしてながめていた。

中野重治が、「これを本にしたときはすでに太平洋戦争がはじまっていた。太平洋戦争は千九百四十一年十二月八日にはじまり、わたしはあくる九日に検挙され、本は四十二年春出ることになっていったから、わたしの筆は縮んだ上あやまりをも書くことになった」といい、また、「わたしは、特別の事情のもとで書いただけにこのふつつかなものに思い出をもっている。……『茂吉断片』は淡路の洲本で書いているが、そのとき泊っていた家の主人青木政一がそのあくる年大阪憲兵隊で殺されたことなどもその一つである」と、この本の戦後版に書きそえ、「わたしの筆は縮んだ」といいながら、戦後になっても、「すべてそのまま残すことにした」、改筆の必要はないとしたところに、わたしは、中野重治の軍国主義的ファシズムに対抗しえた、かれの矜持きやうぢを見るのである。

その軍需会社は、軍部の大陸横断鉄道政策の一翼を担い、巨大なトラックを続々生産していた。そこへ、多くの徴用工が駆り立てられて来た。兵士は一枚の赤紙で戦地に追いやられたというが、かれらも一枚の紙片（青紙といった）でもって、平和産業といわれた商社や銀行や、理髪店や時計屋の職場から引致いんしされ、なれぬ手付きで工作機械のハンドルを回し、鋳物いものの砂を練ったりしていたのである。夜は、急造の寮におしこめられ、親や妻子をおもうて、望郷の念にかられるものも多かったので、当

時の産業報国会が音頭をとり、かれら産業戦士慰安用に、軍需会社には図書室を設備することが奨励された。そのころ乏しくなっていた書籍雑誌も、そこへは優先的に配本されたのである。戦記ものや、歯車の手引書などにまじって、新刊書としてこの『斎藤茂吉ノオト』もおかれていた。しかしだれが読むのであろう。機械油くさい手あかのあともなく、場違いの感がした。

余談ながら、わたしにはつぎのような思い出もある。

死んだわたしは友人の、長兄が、大阪で栗おこし屋をやっていたのが、戦争末期（栗おこしの原料のくず米がなかなか手にはいらないし、へたをすれば、あるじまでが徴用にかかる心配があったので）、企業転換して軍需会社の下請工場をつくった。その辺、世渡りにも長けていたのであろう。

ベニヤ板の加工工場にすぎないのに、飛行機製作所を名のった。ベニヤが航空機のどの部分に使われるのか、まさか特攻隊用ではなかっただろうが……。このようなチャチな工場を急造させ、国の生産力としなければならなかったところに、わたしは軍部の最後のあがきを見るおもいが（いまにして）する。しかも従業員として、近くの遊郭の女が、徴用を受けて働かされていたのである。

そのような工場でも、軍需会社であるかぎりには、図書を備え付けねばならなかった。社長（かつての栗おこし屋のあるじ）は、あまり金をかけずに、本をかきあつめようとしたのであろう。そのなかには、わたしが軍隊にとられて、友人に貸したままになっていた、『詩と詩論』もまじっていたのであった。友人も学徒出陣で、留守中のことである。戦後、そのうちの幾冊かがわたしの手もとにもどったが、その本のどれにも、大きなスタンプで工場の図書印がおされてあった。現代詩の出発点ともいうべき『詩と詩論』と遊郭の女とのとりあわせなど、世の中自体が、どだいチグハグで、おかしくなっていたのだ。

演習 竹内浩三

ずぶぬれの機銃分隊であつた

ぼくの戦帽は小さすぎてすぐおちさうになつた

ぼくだけあごひもをしめてゐた

きりりと勇ましいであらうと考へた

いくつもいくつも膝まで水のある濠があつた

ぼくはそれが氣に入つて

びちゃびちゃとびこんだ

まはり路までしてとびこみにいった

泥水や雑草を手でかきむしつた

内臓がとびちるほどの息づかひであつた

白いりんどうの花が

狂気のやうにゆれておつた

ぼくは草の上を氷河のやうに匍匐しておつた

白いりんどうの花が

狂気のやうにゆれておつた

白いりんどうの花に顔を押しつけ

息をひそめて

ぼくは

切に望郷しておった

国民詩人といわれた三好達治は、三高（旧制）入学時に頭が大きすぎたため、かぶる市販の学生帽がなく、黒いソフト（かれはそのまゑに一応社会人になっていたのだ）のままで、入学式にあらわれたというが、竹内浩三の頭も特大で（学校へ、特大の頭に型通りの帽子をかぶり、だらしなく巻ゲートルをつけて通学していたと、級友の中井利亮はいっている）、かれの戦闘帽はすぐに落ちそうになる、かれひとりあごひもをしめて、ひとかどの兵士になったつもりだ。久し振りの營外演習だというのに、雨のためにずぶぬれである。それでも外に出られたということだけで楽しく、日頃の内務班生活の鬱血を散らそうと、あちこちの濠に、内臓がとび出るほどの勢いで飛び込んでみたりする。やがて、さびしく、望郷の念にかられている自分を見出す。

この詩には、新しい兵士が誕生していくさまがフィルムのようにとらえられており、迫真性がある。ここへ、軍国主義的ファシズムのイデオロギーをぶちこめば、つぎのような詩が容易にできあがる。

新しい歴史 佐伯郁郎

砲煙は絶えないであらう。

旗は押し進むであらう。

秦の始皇帝の万里の長城はも早われわれの心理の遠い彼方へ押しやられてしまった。

あるのは黄土だ。砂漠だ。

蜿蜒として何百里を流れる黄河だ。揚子江だ。

夢よ太古に繋がれ。

新しい神話よ羽搏け。

かつての創世の神々の意志が
いまや新しい歴史の一頁を
東亜に拓かうとしてゐるのだ。

友よ詩歌^{うた}をうたへ

僕は楽器をかき鳴らさう。

不逞に。

そして、高く、ひびきをこもらせて。

この詩は、作者にとっては会心の作だったのか、昭和十六年発行の二つの有力アンソロジー、河出書房版、山雅房版にともども掲載されている。佐伯郁郎は、戦争中内務省検閲係として勤務したというが、当時の中堅詩人であり、かれが風景をうたうときに、たとえば『室戸岬にて』というような佳篇も生んでいる。しかしながら、ここには、ファシズムのみがもつ緊張感がみなぎっていて、それが一種の快感となり、危険である。

おなじころ（というのは、佐伯郁郎の詩では、わがくにはまだ太平洋戦争に突入しておらず、かならずしも戦況はわるくなかった。軍国主義的ファシズムは、敗戦にむかうにしがって、急速にその醜惡なキバをむき出しにしてくるのであるが）、日本浪漫派の詩人と目され、かれの「東洋の満月のご

とき詩集は、ほとんど一民族がもつことの出来る何冊かにすぎない稀有の詩集の一つ」と、保田與重郎をして激賞せしめた蔵原伸二郎は、つぎのようにしてうたう。

戦友よ ゆかむ 蔵原伸二郎

なつかしきものはいづこにありや

故郷はいづこにありや

ふるさとに雪ふり

父母兄弟の顔にゆきふる

ああ ふるさとに梅の花匂はむ

峨々たる山脈の麓

凍れる岩かけにありて

わが決死隊は

いままさに最後の突撃に移らんとす

.....

いざ戦友よ

疾風のごとくゆかむ

この詩には、敏速果敢な兵士の戦闘行為のなかで、人間のかなしみが、脈搏を打っており、そのかなしみは詩的小宇宙に繋がるものである。

しかしながら、そのようなわたしたちの共感が錯覚であったかのように、この詩人の詩は、太平洋戦争がはじまるや、当初の戦勝気分酔うたのか、つぎのようになる。

神いでましぬ 蔵原伸二郎

熱帯樹しげれる南島に

わが天花舞ひ下るとき

防人は吹雪に埋まる

零下四十度の北辺にありて

防人は吹雪に埋まる

このころ

寒熱を超えて季節を飛躍し

ただひたすらに天道に連なる

昭々たるかな この道や

古往今来二つあるべからず

光る豊旗雲の彼方

はるか九天におはします

天皇に帰一し奉るのみ

天下百億の国民ら

これを仰ぎ

これを敬ひ

これを祭り奉る